

新出の『素女妙論』写本二種について

永塚 憲治

公益財団法人 研医会

『素女妙論』は、明の嘉靖年間に刊行されたと推定される房中書であるが、現在の所、中国刊本の所在は不明で、日本写本ないしはそれに由来する転写本によってその内容が知られるに過ぎない。『素女妙論』は、二種類の刊本があったと考えられている。一つは嘉靖十五（1536）年の刊行が記されているもの（以降、嘉慶十五年刊本と呼称）で、もう一つは丙寅仲冬（嘉靖四十五・1566年と推定される）の序文があるもの（以降、嘉靖四十五年序刊本と呼称）である。両者は、細部は異なるものの、類似の部分があることから、異本の関係にある。後者は、房中術の先駆的な研究であるヒューリックの『秘戯図考』に著者自らの手による転写本が収録されており、一般に『素女妙論』と言えば、後者を指す。前者は、従来広く知られていなかったが、2009年に『ワークショップ 曲直瀬道三—古医書の漢文を読む—』（二松学舎大学21世紀COEプログラム事務局）に、大田南畝による天明壬寅（13・1842年）の跋が巻末に附されている、東北大学図書館狩野文庫所蔵本（以降、狩野本と呼称）の影印が収録され、曲直瀬道三の作とされる『黄素妙論』の藍本であることが指摘される（町泉寿郎「曲直瀬道三『黄素妙論』に見る房中養生について」）など、新たな知見が発見されるようになった。

発表者は、先に狩野本と同じく南畝の跋を有する別の写本（以降、発表者所蔵本と呼称）を発見・購入し、それを翻字し、狩野本との比較・検討を試みた（「新たに発見された『素女妙論』の写本—その翻字と校合—」『大東文化大学 中国学論集』29（2011））。その後、調査した結果、嘉慶十五年刊本と嘉靖四十五年序刊本に、それぞれ新出の写本、合計二種を発見したので、今回報告したい。

先に、新たに発見した嘉慶十五年刊本の写本について述べる。狩野本と発表者所蔵本は、共に大田南畝の跋が巻末に附されている。そこには、村井古巖所蔵本を塙保己一が転写し、塙保己一転写本から大田南畝が転写したことが記されている。村井古巖の蔵書は、林崎文庫と塩竈神社に寄贈されたことが知られている。そこで、神宮文庫と塩竈神社博物館の目録を調査した所、神宮文庫に村井古巖旧蔵本ではないものの、嘉慶十五年刊本を藍本とする写本（以降、神宮文庫本と呼称）を発見した。款式は「11行×主に20字」で、「天明四年庚辰季秋書写於俟命館」の書写奥書があり、「昭和22年6月2日／猷納 山口猛之亮」の印がある。書写年代は、狩野本が明治初期、発表者所蔵本が江戸末期と推定されているので、神宮文庫本が、現在発見されているものでは、最古のものとなる。また、書写年代が南畝の跋以前であるので、狩野本や発表者所蔵本とは、別系統の写本となる。神宮文庫は、嘗て長沢規矩也が、漢籍の調査を行っており、目録も出版されている。神宮文庫本は、国書として扱われており、それが今まで発見・注目されなかった理由だと思われる。そこで、国書にも搜索を広げた所、近年一部公開が始まった九州大学図書館の雅俗文庫で嘉靖十五年序刊本を藍本とする写本（以降、雅俗文庫本と呼称）を発見した。雅俗文庫本は、表紙に「神仙活訣録」と墨書があり、本文は青色罫線の用紙に、款式は「12行×不定字（29～42字）」で記されている。管見では、恐らく明治初期の書写かと思われる。現在、『秘戯図考』収録の転写本の元となった写本が、所在不明である為、雅俗文庫本は、嘉靖四十五年序刊本の系統の写本としては、存在が確認できる唯一の写本となっている。

『素女妙論』は、何れの写本も、誤字・誤写と思われる箇所が散見されることから、その本文は読み難い。読解には伝本を比較し校合することが不可欠だと思われる。新たな写本の出現で解決出来たこともあるが、依然として解決できない問題も多々ある。これに関しては、今後の調査と善本の出現を俟ちたい。